

名古屋市名東区猪高緑地の蜻蛉と蝶

高崎 保郎

〒465-0026 名古屋市名東区藤森一丁目14

Dragonflies and Butterflies of Itakaryokuti Park, Meito-ku, Nagoya,
Aichi Prefecture, Japan

Yasuo TAKASAKI

14, Fujimoriittyme, Meito-ku, Nagoya, Aichi, 465-0026, Japan

要旨

猪高緑地は、名古屋市都市公園の中では、広大で大部分が二次林に覆われ、塚ノ杵池始めいろいろな止水域も存在する優れた環境で市自然拠点の一つである。1975年以来毎年、当地の蜻蛉相、蝶相の調査をして来た。一般の目からすると、一見、植生の分布や地形等公園の全般的景観に大きな変化はない様に見えるかもしれないが、近年その種数の減少は著しい。

その確たる要因は必ずしも明確ではないが、かかる状況に鑑み、市の自然拠点と見做される都市公園及び類似環境の生物相の正確かつ継続的把握と記録の意義を、行政と保全・愛護関係主体は一層認識すべきであると思料する。

はじめに

猪高緑地（主体を成す北半は名古屋市名東区猪高町上社、障がい者スポーツセンター辺りから南の細長い南半は猪高町高針）は自宅から約1.6kmの位置にあり、中区から現名東区に転居した翌1975年から市内の好採集地の一つとして訪れる様になった（図1）。1980年代後半は比較的濃密に、2000年代に入ってから暫く疎遠になるなど年代により濃淡はあるが、とにかく2015年迄調査を続けて来た。2015年に自宅から至近の明德公園の蜻蛉と蝶の再調査（62回）を実施した結果、1975年から2015年迄の間の全記録種と比較すると、蜻蛉は棲息水域の明らかな劣化を主因として種数が51%、蝶は種の入れ代わりはあるが数字上種数は90%の結果を得た（高崎、2015）。

引き続き2016年は最後の作業として猪高緑地について同様な再調査をすることとした。2016年3月30日から10月7日まで、59回の再調査を行った。種により適



図1. 猪高緑地位置図

期を失したりしたこともあり、やや不充分的誇りを免れない。同好者の補填を待つ次第である。

I. 猪高緑地の概要（図2～18）

尾張平野東部一帯に接する尾張東部丘陵の中の東山丘陵に位置する。猪高緑地（以下、当地又は園内と略す）はかつては多数の村を統合して明治39年に成立した愛知郡猪高村の集落、田畠、丘陵の雑木林などから成る農村地帯であり、この環境は昭和30年名古屋市千種区猪高町として名古屋市に合併された前後も暫く残存しているところもあった。昭和50年名東区に分区した頃には殆ど宅地造成されたが、当地は近隣の明德公園等と共に都市公園条例に基づく公園・緑地として保全され現在に至っている（名東区開設10周年記念誌編集委員会1985）。

1980年代には箱物行政思想に立脚するところの、塚ノ杵池ヨシ帯にオチンを、西堀谷はホタルショウブの里に、井堀谷には大駐車場を、さらに野外音楽堂、遊園地

等の施設を市は計画していたが、付近住民始め市民の強力な反対や幸いにもバブル崩壊による経済的事由にもよりそれらは挫折した。テニスコートやアーチェリー場設置などによる侵食も一部にはあったが、現在は公園として望まれる遊歩道の整備など必要最低限の良識ある整備に止まっている。

敷地面積66.2haは起伏に富み標高約50～100m、コナラ、アベマキ、アカマツ（減少）を主としてガマズミ類、タカノツメ、ソヨゴ、ヒサカキなどから成る二次林に概ね覆われている。ギャップ状の場所が各所で見られる。増大した竹林はかなりの面積を占め、保全団体が制御活動をしている。2005年頃から大きな話題となったナラ枯れについては一段落したのか余り聞かれなくなった。

水域は流水を欠き、大小の池と湿地帯の所が存在する。域内最大の塚ノ杵池は32,113㎡で堰堤部以外は緩傾斜の汀から成り満水時以外は岸が樹林に鬱閉される部分は少なく良好な環境である。池の南西端に小さな、東南端に広範囲にヨシ帯を有し、後者は陸地部分の奥の方は成長した高茎の群落、それに続く汀の水中は沖に向かって順次丈が低く疎な進出途中の状態を呈していたが、近年この部分へのスイレンの侵襲が増え低茎疎なヨシ帯は衰退している（図3、4、5、6、7、8）。水草相の変遷については長期に亘る調査がなされ（浜島・須賀、1986；浜島、2004；浜島、2010；飯尾ほか、2010；浜島・飯尾、2012）、要約すると1982年から1986年迄は在来種のヒシ、ガガブタが各々増減しながら優占種の地位を占めていたが、1984年発見された移入種ハゴロモモ（フサジュンサイ）が1988年にはとって代わった。1991年には園芸種スイレン（セイヨウスイレン）が投入され、現在は開水面以外の大部分を占めるに至った。2011～2012年の堰堤改修後一時的に見られなくなったハゴロモモは現在再び増大しつつある。1987年には在来種ジュンサイが出現した。近年在来種イヌタヌキモは増えてつつあるが、それ以上に外来種オオバナイトタヌキモの増加が目立つ。南西部、東南部ヨシ帯前縁に存在したカンガレイは激減しクログワイは消滅した。

池周囲の二次林の集水域に汚染源は存在せず水質は長い間良好であったが、スイレンなど過度の水生植物の繁茂と、その枯れた植物体の池底への堆積はヘドロ化を生じ、溶存酸素の減少と富栄養化を促進し水質を悪化させ

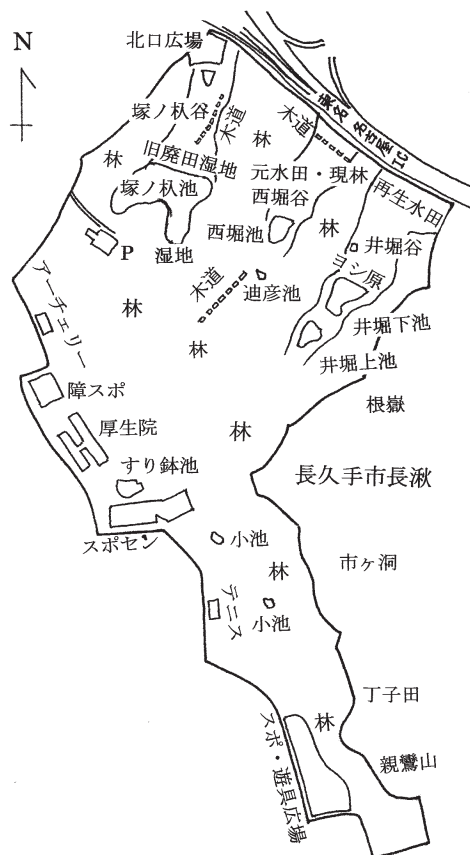


図2. 猪高緑地略図



図3. 塚ノ杈池北西からの全景, 1986. 12. 7撮影



図4. 2016年の同位置からの全景, スイレンが水面占拠



図5. 東南岸ヨシ群落, 疎らな部分を伴う, 1994. 5. 22撮影



図6. 2016年の同所, 群落衰退傾向, スイレンが間近まで覆う



図7. 東南岸ヨシ群落, 疎らな部分多, 繁茂はガガブタ, 1994. 5. 22撮影



図8. 2016年の同所, スイレンに圧迫されている



図9. 塚ノ杵池 堰堤下廃田湿地, 1987. 11. 8撮影



図10. 2016年の同所, 木・草本進出, 植栽・ビオトープ池新設



図11. 堰堤から井堀下池全景, 開放水面, 1986. 12. 7撮影



図12. 2016年の同所, ヨシ・湿生草本に覆われる



図13. 井堀谷, 北下方を望む, 1986. 12. 7撮影



図14. 2016年に同所ほぼ同位置から, 樹木増・人口池・下方再生水田



図15. 2016年の西堀谷，昔は谷津田・ハッチョウトンボ棲息



図16. 2016年のすり鉢池，奥に湿生草原を伴い一見良好に見える



図17. 長久手市長湫市ケ洞の谷津田と二次林，1989. 5. 28撮影



図18. 2003年南部長湫造成中，市境稜線に樹木を残すのみ

ていると考えられている（榊原ほか，2010；飯尾ほか，2010）。

外来魚類は1982年にはブラックバスとブルーギルの存在が確認されている（荒尾，2010）。

2014年頃岸でライギョの稚魚の群泳を見た。4～5月には岸でブルーギルの稚魚を多数見る。大鯉も存在する。

塚ノ杵池に次いで大きな池は，いずれも北東部の元谷津田の谷の谷頭にある元灌漑用池，井堀上池5,157㎡，井堀下池6,886㎡（図11，12），西堀池9,613㎡である。現在ではいずれも林に鬱閉され，ヨシや湿生草本に覆われた，水草を欠く粘土質泥底水色黄土色の全く水生生物に乏しい池である。西堀池へは行く道すら無い。

公園中程の市厚生院南に所在するすり鉢池（旧称お寺

池）は広い湿生草本の草地を付帯し，その林縁に接する部分にはかつてモウセンゴケも多かった。池本体にはガマ，ヨシが生育し夏季にはヨシは草地にも広く繁茂する。浮葉・沈水植物を欠き粘土質泥底で一見したところでは良さそうな環境に見えるが水生生物はザリガニだけで全く乏しい（図16）。

その他林縁には切り立った土の岸の小池が散在するがハビタット足り得ない。

当地の主要な水系は昔も今も北部のいずれも谷頭のため池から給水されていた西から塚ノ杵，西堀，井堀の3本の谷である。昔は谷津田が存在していた。塚ノ杵池堰堤下の谷上部の水田跡は現在ビオトープ化され，小さな池，小湿地，水耕地などがあり，陸上園芸植物やサギソ

ウ、オモダカ類などが栽培されている（図9, 10）。谷は下端迄林内を塚ノ杵池放流水、湧水が地表を浅い緩流となって流れ最終的には最下端北口広場の前で濁った池となる。下流に向かって木道を含む何本かの遊歩道が設置されている。中央の西堀谷も下端では浅い表流水と湿地状部があり、谷を渡るための木道がかかっている。ハンノキ湿地と名付けられている。草木が繁茂し上流への道は無い（図15）。東端の井堀谷は井堀下池の下方に広い高茎のヨシ原と小池があり、その下方は再生水田とされ児童の教育の用に供されている（図13, 14）。塚ノ杵池東南角の二次林内にも若干の湿地が残存する。その上部はかつて小水田であった様に記憶する。現在の園内には、湧水由来の貧栄養極く浅い小開水面と湿生草本で構成されるハッチョウトンボが棲息する様な本格的向陽湿地は存在しない。

Ⅱ. トンボの記録

トンボの記録は1975年からである。1980年代はベッコウトンボの飛来定着があるなどで調査密度が一番高かった。1990年代は前半に集中している。2000年代では市保全協議会のため池調査データも加わっている。2010年代前半は市レッドリストと堤体改修池干しの為の調査を行っている。

主たる調査場所はやはり塚ノ杵池である。塚ノ杵谷と西堀谷は初期の頃、井堀谷は比較的后年迄良好であった。当地南半は水系に乏しくトンボの棲息環境として適していない。

以下種毎の経年変化を述べる。

1. イトトンボ類

(1) オツネイトンボ

塚ノ杵池で1978年に1回目撃したのみ。絶滅。

(2) ホソミオツネイトンボ

塚ノ杵池で少ないが2010年迄見られた。絶滅。

(3) アオイイトンボ

塚ノ杵池では2016年も産した。1980年代にはすり鉢池でも見られた。

(4) オオアオイイトンボ

塚ノ杵池、井堀谷、その他林縁の小池に普通に産したが、2016年には1ヶ所の小池でしか見られなかった。

この池では少なくともなかった。

(5) モノサシトンボ

塚ノ杵池で2003年迄は記録がある。明徳公園では1987年迄は多産したがその後絶滅した。当地でも絶滅。

(6) キイトンボ

塚ノ杵池に少ないながら2016年も存在。

(7) ベニイトンボ

塚ノ杵池で2006年6♂, 2007年1♀, 2009年2♂の最終記録があるがその後見ない。前年2005年の産卵があったとすると少なくとも5年間の定着と考えられる。飛来源は約2.3km隔たる日進市愛知学院大の池であろうか。

(8) クロイトンボ

調査全期間を通じ唯一最も普通のイトトンボ。2016年も塚ノ杵池に多産。

(9) セスジイトンボ

以前から少なく塚ノ杵池で1988年1♂, 1989年若干, 2009年1♀の記録しかなく、2009年は飛来の可能性もある。絶滅。

(10) モートンイトンボ

稀で塚ノ杵池堰堤下の廃田湿地で1975年1♀, 1987年1♀, 1989年1♂の記録しかない。絶滅。

(11) アオモンイトンボ

多くはないが塚ノ杵池に2016年も存在する。

(12) アジアイトンボ

湿地、水田、池沼に広く産し井堀谷の水田に多い。

2. ヤンマ科

(1) サラサヤンマ 1976年以来2013年迄記録され普通に見られた。1980年代、1990年代には林内湿地の♂縄張りポイントでは採集除去しても次から次へと飛来する程多産した。幼虫は塚ノ杵池東南林内や井堀谷の湿地、水溜りに棲息する。近年の公園整備により塚ノ杵谷と西堀谷下端には本種の好みそうな湿潤地が生成され、かつ遊歩道整備により近付き易くなり、本種棲息域は拡大され、調査し易くなったにも拘らず、2016年は全く成虫を見ず後日上記東南林内湿地で幼虫を探したが、オニヤンマ、オオシオカラトンボ幼虫のみであった。

(2) アオヤンマ 1991年に吉田雅澄氏が塚ノ杵池で未

熟な5頭程の成虫を発見したのが唯一の記録である（吉田私信）。未熟とのことであるので1～2年の短期定着の可能性はある。池東南端のヨシ群落は本種の好みに合う環境である。

(3) ネアカヨシヤンマ 2003年と2004年に井堀谷再生水田上を黄昏飛翔する各1♂を採集した。井堀下池直下の広い高茎ヨシ原に遷移した廃田湿地辺りからの発生であろう。2016年の黄昏に体形から本種を疑わせる1頭を目撃したが確定できないので記録としては扱わない。

(4) マルタンヤンマ ネアカヨシヤンマと同様に黄昏飛翔する。2003年には上記ヨシ原で産卵しようとする♀を♂が攫って飛び去るのを目撃した。2016年には産卵の為か水田へ降下した1♀を目撃した。

(5) ヤブヤンマ 上記2種と同様に黄昏飛翔する。半日陰の小池、水溜りなどから発生する。2004年には3♂を採集した。2016年には確認できなかった。

(6) ギンヤンマ 黄昏飛翔種の中では最も多い。塚ノ杵池の様な明るい大きい池を好み、2016年は同池で普通に見られた。

(7) クロスジギンヤンマ やや日陰の小さい池を好むが、塚ノ杵池でも樹陰のある岸では見られる。2016年には2回目撃した。

(8) オオギンヤンマ 恒常的な南方からの飛来種であるが、1998年だけは特異的に全国に大量飛来し塚ノ杵池でも1♂を採集した。

3. サナエトンボ科

(1) ウチワヤンマ 塚ノ杵池で2013年迄は普通に見られたが、2016年は同池では全く見なかった。8月末北口広場の草地の植え込みの高さ30cmの枝に何度も止まる1♂を目撃したのみでこれは飛来であろう。

(2) コオニヤンマ 1987年偶発的に飛来した1♂を目撃した。園内には本種の棲息可能な流水域はない。

(3) オグマサナエ 1978年から1989年迄塚ノ杵池で少ないが確認できた。絶滅（図19）。

(4) フタスジサナエ 1978年から1989年迄塚ノ杵池で少ないが確認できた。絶滅（図20）。

前種と本種は尾張平野で最普通種であったが、現在名古屋市内で棲息するのは守山区志段味の尾張旭市森林公園境だけである。長久手市、日進市の東部丘陵地帯では現

在も普通である。

流水域を欠くので当地では本科の種は少ない。

4. オニヤンマ科

(1) オニヤンマ 夏から秋にかけて園内の路上などを飛翔するのを時々目撃する。塚ノ杵谷、西堀谷下方の極く浅い表流水でも発生可能であるので、幼虫棲息環境は増えたと言える。2012年は北口広場上空を飛ぶ2個体を目撃。内1♀を採集したが未熟な個体でそれを示唆する。

5. エゾトンボ科

(1) トラフトンボ 1982年以来少数だが塚ノ杵池で目撃されている。環境から見て定着している可能性はある。2016年も1個体を目撃した。

(2) タカネトンボ 林内の小池、水溜りから発生する。1986年すり鉢池付近で採集した1♂の記録しかない。

6. ヤマトンボ科

(1) オオヤマトンボ 1986年から2013年迄塚ノ杵池で普通に目撃採集されていたが、2016年には5月に1回目撃しただけで盛夏、秋には全く目撃していない。

(2) コヤマトンボ 流水性種であるが1991年に塚ノ杵池で偶発飛来1♂が吉田雅澄氏によって採集されている（吉田私信）。

7. トンボ科

(1) チョウトンボ 浮葉植物の多い塚ノ杵池の優占種。2016年も多産した。

(2) ナツアカネ 1980年代迄は園内に広く多産したがその後減少した。塚ノ杵池から羽化する個体もある。2016年はアカアカネより少ないが、3♂2♀を採集した。

(3) リスアカネ やや日陰の小池から発生するが塚ノ杵池でも見られる。減少することなく普通で2016年も南部小池で多数見た。

(4) ノシメトンボ 1980年代迄は普通。1990年代になって何故か増大したが2000年代に入ってその勢は衰え現在ではむしろ稀になったと言うのが全国的な傾向で、当地でもその様相は同一である。1994年には井堀下池の湿生草木帯で多数産卵していた。2016年には井堀谷を主とし5♂4♀採集を含む10個体程を確認した。

(5) アキアカネ 最も普通で代表的なアカトンボであ
たったが減少が激しい地方が多い。愛知県では2015年
はやや多かった。園内では1980年迄多産した。今では
トンボは2、3種位しか見られないすり鉢池でも同年代
迄は各種のアカトンボを産した。井堀谷再生水田地帯は
各種アカトンボが多い所であったが、2010年代に入っ
てからは減少が激しい。

アキアカネは2015年に続き園内では2016年も比較的
多かった。勿論昔日の比ではない。

(6) コノシメトンボ 調査を開始した1975年から記録
があるが少なく、2016年は塚ノ杵池ほかで1♂1♀を採
集したのみであった。開水面縮小の影響があるかも知れ
ない。

(7) ヒメアカネ 典型的な向陽湿地性種なので通常は湿
地周辺には多産するが、2016年は林内で未熟個体2♀、
湿地状部で成熟個体1♂を採集したのみであった。

(8) マユタテアカネ アカトンボの最普通種であるが
2015年明德公園では1♂しか採集できなかった。園内
では2016年は塚ノ杵池、井堀谷で減少はしたものほぼ
普通に見られた。

(9) マイコアカネ アカトンボの中では個体数が少ない
種であり、園内では塚ノ杵池での1986年の記録しかない。
2016年には見られなかった。

(10) ネキトンボ 成虫の個体数は少ない。2016年には
塚ノ杵池で1対の産卵も見られたので定着していると思
われる。

(11) キトンボ 個体数は少なく、特に近年の減少は著し
い。市レッドリスト絶滅危惧IB類、塚ノ杵池で1983年
1回、1986年4回の記録がある。極く稀な飛来はあるか
も知れないが、塚ノ杵池での発生は先ず考えられない。
絶滅。

(12) ハネビロトンボ 南方から又は本土到着地で世代を
繰り返した個体の飛来である。飛来種の中では恒常的な
種で、時にその場で羽化した場合も無いではないがこの
地方では極めて稀なことで、飛来種として扱う。1987
年に塚ノ杵池で唯1回1♂を採集しただけである。2016
年は勿論見ていない。

(13) コシアキトンボ 塚ノ杵池、その他小池、すり鉢池
でも現在も見ると。未熟成虫も林縁上空を群飛するのを広
く見る。夏季園内のどこでも見かける最普通種。

(14) コフキトンボ 調査初年の1975年から塚ノ杵池で
記録があり1980年代は多かったが、その後減少し塚ノ
杵池での2013年迄の記録である。普通種ではあるが必
ずしも普遍的ではない。明德公園では1970年代初頭ま
でしか記録がない。長久手市でも減少著しい。2016年
は見られなかった。絶滅の可能性が高い。

(15) ハッチョウトンボ 向陽湿地の指標種である。湿地
の湿生植物の丈が高くなり密生する様になると棲息でき
なくなり消滅する。現在の園内に存在する湿地状部はこ
の様な状態で本種は産しない。かつて塚ノ杵池堰堤下の
廃田湿地に1986年迄、西堀谷の西堀池下の廃田湿地に
1988年迄産した。現在の西堀谷の景観からは想像もで
きないことである。塚ノ杵池東南ヨシ帯上端の湿地部や
林縁にも産した。絶滅（図21）。

(16) ショウジョウトンボ 浮葉植物の多い塚ノ杵池の優
占種の一つ。2016年にも多産。

(17) ウスバキトンボ この地方では幼虫は低温の為越冬
不能、翌春南方から飛来して再び世代を繰り返し、夏以
降増え群飛する。広く園内で見られる。2016年の園内
での初見は7月19日である。

(18) ハラビロトンボ 主として湿地、塚ノ杵池など池沼
でも見られる普通種。2016年も普通。

(19) シオカラトンボ 塚ノ杵池始め園内一円で最普通
種。2016年も最も普通。

(20) シオヤトンボ 春季出現する。主として湿地・水田
などから発生するが、園内ではそれ程多くない。2016
年も見られた。

(21) オオシオカラトンボ 塚ノ杵池始め池沼でも見られ
るが、湿地状部周辺では優占種となる。2016年も多産。

(22) ヨツボシトンボ 戦後から暫くは比較的珍しい印象
があったが、1980年代前後から増加し丘陵池沼に普遍
的に見られる様になった。園内の主たる棲息場所は塚ノ
杵池の南西、南東の高茎ヨシ帯で1980年代から2013年
迄は多産した。2016年は何故か全く見る事ができな
かった。

(23) ベッコウトンボ 1986年の飛来産卵（推定）に始
まり、1987年は成熟、未熟合せ少なくとも7個体、1988
年は当日羽化を含む未熟、成熟合せ少なくとも5個体を
確認し、僅か3年と推定される塚ノ杵池への飛来定着で
あったが特記されるべき出来事であった。

この前後、猪高緑地を含む名古屋市東部、日進市の4ヶ所程で本種の一時的定着、連続年飛来が相次いだ。知多半島方面の多産地に於ける一時的大発生が原因かなどが考えられるが推測の域を出ない（図22）。

Ⅲ チョウの記録

チョウの記録は1976年からあり2016年迄の41年間である。調査頻度は1980年代は多いがそれ以降はトンボ調査の際の副次的なものである。別に1990年代中頃と2000年代初頭のチョウ相についての報告がある（大塚、2005）。リストのうち自らの記録が欠ける種はこの報告で補っている。

1. セセリチョウ科

2015年迄に7種が記録されている。1986年にはコチャバネセセリ、ホソバセセリを採集しており、同年ミヤマチャバネセセリ1頭も採集した（図23）。本種は近傍では1976年名東区藤森一丁目の自宅で1頭採集、その他名東区猪高町と記されているが猪高緑地を指す1977年の記録（中野、1978）がある。その後の大塚の記録（大塚、2015）でも、明德公園でも、上記3種の記録はない。オオチャバネセセリは何故かどの記録にもない。ミヤマセセリは1988年迄は普通で、1996年頃もそうであったらしい。2015年、2016年には見られなかった（図24）。

2016年に残存するのはキマダラセセリ、チャバネセセリ、イチモンジセセリだけである。

2. アゲハチョウ科

2016年5月12日井堀谷でジャコウアゲハ1♀を目撃、当地での初記録であるが飛来であろう。明德公園でも2013年飛来1♀が撮影されている。

キアゲハは食草の関係であろうが稀で、2003年迄の若干の記録（大塚、2005）を見るだけである。

アゲハは多産する。

クロアゲハは普通である。1986年5月5日無尾型1♀を採集したが（図25、26）、名古屋市では唯一、愛知県でも過去に1例の報告（木村、1955）しか見ない極めて異例な記録である。本形質を受け継ぐ子孫が園内や近傍に今も存在するであろうか。

園内の最高点111.1m（守山区の東谷山に次ぐ市内2番目の高さ）の親鸞山の名古屋市側で、オナガアゲハが

2001年1♂（原、2004）と2005年1♂（川崎、2007）の2回採集されている。一時的定着か飛来か不明。

ナガサキアゲハは2001年以降記録されており普通種化している。黒色アゲハでは最多。

モンキアゲハ、カラスアゲハも普通に見掛ける。アオスジアゲハは多い。

園内ではカンアオイ類は1987年に1株発見しただけでギフチョウは産しない。南端東側親鸞山の長久手側山麓の長湫丁子田の湿性の谷にヒメカンアオイの群生場所があり、2006年から2008年前後、付近住民が無思慮にもギフチョウ幼虫を放ち一時発生を続けた前歴があり、これについて名古屋昆虫同好会連絡誌に急いで報告糾弾したところであるが、既にここから羽化した成虫を採集し、すわ新産地と色めき立った人達もいた。今後もかかる行為を繰り返す虞無しとしないので、注意を怠ってはならない。国内移入も厳に慎むべきなのに、同所の流れでは時代錯誤のホタル放流も考えられている様である。

3. シロチョウ科

6種が知られているがスジグロシロチョウは稀で2016年には確認できなかった。ツマグロキチョウも園内にはケツメイ類が生育する様な荒地が無いので余り多くない。2016年には、4個体を採集した。

4. シジミチョウ科

ウラギンシジミ、ムラサキシジミは普通である。ウラゴマダラシジミは、イボタが林縁の日当りに多いのに極めて稀で、1986年に2頭目撃のみの記録である。

アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミは2004年には多産したとされている。（大塚、2005）。

ミドリシジミは稜線を隔て東側に隣接する長湫根嶽の水田・湿生林地帯が、この辺りの最大の産地であったが、長湫南部土地区画整理事業により2000年から2003年の間に完全に宅地造成された。名東区猪高緑地側は長久手側にはとても及ばないが北側谷筋を主に程々に産し2010年迄の記録がある。

コツバメは1980年代は少なくなかった。2004年は少ないとされている（大塚、2005）。これが記録としては最後である。

トラフシジミは2004年は多産したとされている（大塚, 2005）. 今では春季路上などで見ることはなくなった.

ウラナミシジミ, ヤマトシジミ, ツバメシジミは普通に見られる. ベニシジミは少ない.

ルリシジミは多くはなく目撃できる期間が限られる傾向があるが棲息する.

近年は園内整備の高木の植栽は少なくマテバシイもムラサキツバメも見えていない.

2016年はアカシジミ目撃のみでその他のゼフィルス類は見えていない. 春季のコツバメ, トラフシジミも見えておらず前者は絶滅したと思われる. ゼフィルス類の出現期はやや調査の機会を失したので精査すれば存在する種もある可能性はある.

5. タテハチョウ科

(1) テングチョウ 2016年現在も普通である. エノキを寄主とするチョウでは最多.

(2) アサギマダラ 毎年秋季に散見する.

(3) 狭義のタテハチョウ ヒョウモンチョウ類はツマグロヒョウモンとミドリヒョウモンの2種しか確実な記録はない. 2016年は前者は多産, 後者は多くない. 園内でのツマグロヒョウモンの初見は1994年になってからである. アサマイチモンジは少ない. コミスジは普通である.

ホシミスジは園内で2012年と2013年に各1頭が発見されたのが最初である. (中橋・田澤, 2014). 2016年には北西角の北口広場に列植されたユキヤナギに午前11時頃迄に複数が飛来し, 林縁でコミスジと混飛するのも見かける. 同年の園内での目撃, 採集個体数は30頭を越える. 2015年に明徳公園で3頭採集し, 小さなユキヤナギが1本だけ植わっている自宅庭に同年2回の飛来があった. 2016年には庭に5頭の飛来があった. この2016年の状況から判断して2016年時点での名東区の東縁北・中部では定着したと考えてよいであろう.

キタテハはカナムグラが確認できず稀で2016年には見られなかった.

ヒオドシチョウ, ルリタテハは春季越冬個体はしばしば見る. ルリタテハは夏季も普通.

ヒメアカタテハは普通である.

ゴマダラチョウは1980年代から2000年代初頭は普通

に産した. 2016年は2頭だけ採集したが減少していると思われる.

2010年に発見された放蝶アカボシゴマダラ（間野・岩元, 2011）は同年12月越冬幼虫がゴマダラチョウ幼虫と共に発見されているが（中橋, 2011）, その後発見されておらず結局同年だけの一過性のものだったらしい. 尚, 本種は2012年に昭和区鶴舞公園でも1頭目撃されている（高崎・山田, 2013）.

コムラサキは2016年北口広場池畔のヤナギでしばしば目撃採集した.

アカタテハは従来から多くなかったが, 2016年1頭を採集した.

(4) ジャノメチョウ類 最も多産するのはヒメウラナミジャノメで, サトキマダラヒカゲ, ヒカゲチョウも普通である. ヒメジャノメは多くない.

ジャノメチョウは2002年迄の記録がある（大塚, 2005）. かつては自宅庭にも飛来した.

クロコノマチョウは普通に産し, 2010年薄暮塚ノ木池水面上を2頭バ飛翔するものも見られた. 2016年も薄暮時よく見られた.

IV. 衰亡の状況とその推定要因

1. トンボの場合

当地に於ける1975年から2016年迄の42年間の全記録種は52種である. この中にはコオニヤンマ（近傍から）, コヤマトンボ（近傍から）, オオギンヤンマ（南方から）, ハネビロトンボ（南方から）の4種の偶産種（飛来種）とベニイトトンボ（5年程）, アオヤンマ（1, 2年程）, ベッコウトンボ（3年程）の3種の一時定着種を含む. これら7種を差し引いた定着種と見られるのは45種である.

2016年の確認種は飛来と見られるウチワヤンマ1種を含む29種である. 全記録種52種に対する残存率は56%である. なお, 定着種に限った残存率は45種対28種の62%となる. 42年間にほぼ4割の種が失われたことになる.

飛来種, 一時定着種もとにかくその場へ来たと言うことは, その種に適する環境を有することを示し, 棲息環境の多様性と言う観点からは, あながち無価値無意味と切り捨てられるものでもない.

では, 喪失の原因を先ず個々の種毎に探してみよう.

オツネトンボは1978年1回だけの目撃であったが、ホソミオツネトンボは少ないながら2010年迄は長らえた。オツネトンボは本来少ない種であることが早期に消滅した一因であろう。これらの種は主に垂直に直立する抽水植物に産卵する。ヨシの様な太くて堅い茎でなくカンガレイ、ホタルイ、クログワイの様な丈が低く柔らかいカヤツリグサ科、イグサ科の抽水植物を好む。植物調査によるとヨシ帯前面に生育帯を有していたこれらの植物は1986年迄は変化がなかったが2001年には激減、その後クログワイは絶滅したとされる。ホソミオツネトンボの消滅は産卵対象の衰亡が影響しているのではないかと推測される。同様な産卵習性であるが、より頑丈な体躯と産卵管を有するアオイトトンボはヨシの若く柔らかい茎に産卵するのか2016年も健在である。

モノサシトンボは池沼、緩流に普通の種であるが、塚ノ杵池では2003年を最後に絶滅した。原因ははっきりしない。明徳公園では1987年迄は多産したがその後消滅した。この場合は釣堀化による富栄養化か、浮葉植物の絶滅が原因ではないかと思われる。

ベニイトトンボは移動分散先では、そのまま世代を繋ぐのが殆どであるが、塚ノ杵池では5年間ほどの存在のみで2010年以降は姿を消した。棲息環境の著しい変化は見られず、むしろ産卵対象の浮葉植物は増え続けるその原因は不明である。

セスジイトトンボの確実な定着は1989年迄で、かつては最普通平地池沼性種であった本種の減少は、ひとり塚ノ杵池の問題だけでなく全国的傾向である。もともと個体数はそれ程多くなかったが、浮葉植物は途切れることなく存在したのに絶滅した原因ははっきりしない。市では2015年レッドリスト改訂時準絶滅危惧種に指定するに至った。

モートンイトトンボは向陽低茎草本の棲息に適する湿地が存在した塚ノ杵池堰堤下で少ないながら見られたが、草本の密集高茎化が進み1990年以降絶滅した。

尚、園内ではムスジイトトンボとホソミイトトンボの記録はない。

サラサヤンマは棲息可能場所がむしろ増加したと思われるのに2016年は成虫も幼虫も全く見られなかったのは不思議である。従来の多産を思うと消滅は少々考えにくい。

井堀谷で黄昏飛翔するヤンマ類の2016年の1夕当りの目撃数は僅か1～2頭又は3～4頭で往年の群飛は見られず採集も出来なかった。

オグマサナエとフタスジサナエは発生場所周辺に固執する傾向があることから供給不十分であること、当地は尾張東部丘陵地帯でも最先端（西端）に位置し、分布が稀薄になることもあってか1989年迄棲息した後絶滅した。

オオヤマトンボは2016年は塚ノ杵池で初夏に1回しか目撃できなかった。スイレン、イヌタヌキモ、オオバナイトタヌキモ、ハゴロモモ頂部の繁茂で夏から秋季には開水面が全体の1割あるかないか位に減少したのが、岸に沿う広大な開水面を好む本種を忌避させたと考えられる。ウチワヤンマも園内では北口広場への1回の飛来だけで、塚ノ杵池で見られなかったのも同様な理由によると思われる。

コフキトンボは2013年迄の存在である。東南部ヨシ帯など棲息可能な環境であるが絶滅状態の原因はよく判らない。

ハッチョウトンボの絶滅は本種の棲息に適するタイプの向陽湧水湿地の消失による。1970～80年代には自然愛好家朱雀氏が塚ノ杵池堰堤下のハッチョウトンボが棲息する湿地の遷移を喰い止めようと1人で努力されていたが及ばなかった。本種の存在は1980年代末迄である。

2016年に塚ノ杵池でヨツボシトンボが棲息環境が保たれているのに全く見られなかった理由は不明である。

アカネ類の動向について一覧すると、主に水田に依存するアキアカネ、ナツアカネの激減とノシメトンボの減少は、水田管理方法の変更や新農薬使用等に起因する全国該当県に於ける減少原因と同様である。又、1987年以降園内では見られなくなったキトンボも全国的減少傾向と軌を一にする。アキアカネよりもナツアカネの激減が顕著である。ノシメトンボを10個体程確認できたことはむしろ意外であった。園内に於ける主に池沼、湿地に依存するアカネ類の内ヒメアカネは激減、もともと個体数の少ないコノシメトンボとネキトンボは僅かではあるが2016年も確認できた。マイコアカネは当然のことであろうが2016年も見られなかった。マユタテアカネは減少はしたものの一応普通に見られた。ヒメアカネの激減は本種に最適の湿地が園内では存在しなくなったことによるものであろう。アカネ類は6月前後の羽化期に

全く見ず、夏季の未熟成虫の林内攝食期もヒメアカネ2個体以外全く見ることがなく全体に衰退著しい。現在園内で最も広くかつよく見られるアカネはリスアカネのみである。

全記録種52種について2016年現在の状況をまとめると、絶滅9種、絶滅の可能性も考えられる種2種程、激減6種程、大なり小なり減少7種程で、42年間ほぼ不変と見做すことができる種は半分強の28種に過ぎない。

尚、主たるトンボ棲息水域である塚ノ杵池について考察すると

①周辺二次林景観、汀の状態には大きな変化はない。むしろ西側は堤体工事に伴う岸辺の盛上げで平坦草地部分が生じ樹木の鬱閉状態が改善されている。

②周辺二次林集水域に大きな変化も、汚染源の発生もなく供給水の水質には変化はないと考えられる。

③過剰な浮葉・沈水植物の増大継続がもたらす溶存酸素減少、ヘドロ生成等による富栄養化による水質悪化の可能性はある。但し、各種水質検査項目がトンボ幼虫に与える影響についての体系的調査研究は充分ではないので、水質の何が原因とはっきり言えないことに留意しなければならない。

④スイレンを主とする浮葉・沈水植物の繁茂が抽水植物を圧迫し、又、開水面を著しく狭めたことが或る種のトンボの棲息に影響を与えた可能性はある。

⑤塚ノ杵池を幼虫の棲息の場とするトンボの減少要因として外来魚の増大を挙げるのが一般的考え方であり、確かにその一面はあるとは思われるが、2001年名古屋市環境科学研究所の塚ノ杵池に於けるオオクチバスとブルーギルの各4個体の胃内容物の調査では、オオクチバスの全捕食昆虫類94個体のうちトンボは成虫1個体だけ、ブルーギルのそれは全510個体のうち大半はユスリカ幼虫でトンボ成幼虫は1個体もなかった。同時に調べられた他の三つの池の昆虫類総個体数589（検体魚総数17）のうち、トンボ成虫幼虫は3個体のみであった。この三つの池ではオオクチバスは昆虫を全く捕食しておらずヨシノボリを主としカマツカ、エビ類のみを捕食していた。ブルーギルは逆でヨシノボリとその他魚3個体のみ、捕食していたのは昆虫を主とした節足動物ばかりであった。トンボ幼虫の棲息密度はかなり低いことを勘案したとしても、この調査に限って言えば捕食されるトン

ボ成幼虫は思ったよりも少なく大きな影響を受けていないと見られる（鎌田、2003）。

2. チョウの場合

コチャバネセセリ、ホソバセセリ、ミヤマチャバネセセリは1986年迄で絶滅、ミヤマセセリは10年後の1997年以降に絶滅している。

ウラゴマダラシジミは1986年だけの記録、ウラナミアカシジミ、ミズイロオオナガシジミは2004年迄は多産としているが（大塚、2005）2016年には発見できなかった。ミドリシジミの記録は2010年迄ありそれ以降は不明である。

春を告げるコツバメ、トラフシジミも2016年は見えていない。後者は以前は自宅庭のフジにも飛来し生殖活動も行った。

ゴマダラチョウは存続している。

市準絶滅危惧種に指定されているジャノメチョウは2002年迄の記録があり（大塚、2005）以降絶滅したと思われる2016年には見なかった。

1976年から2016年に至る41年間の全記録種は57種で、飛来種ジャコウアゲハと放蝶アカボシゴマダラ以外の55種は定着と見られる。

2016年の確認種は41種で、全記録種に対する残存率は72%である。各々定着種どうしの場合、55種対40種は73%である。

尚、ゼフィルス3種は存続の可能性はある。次の年以降の調査に待ちたい。

2016年に於けるチョウの残存率は7割強で、トンボの残存率約6割を大幅に上回る。この傾向は明德公園の場合と同様で、寄主植物、生活空間の変化よりも、ため池や湿地等の水系の変化の影響による方が大なのであろう。

参考までに2009～2014年に東京都のチョウ相を4区域に区分して調査した結果のうち、市街地内の主に都市公園・緑地に依存する都区内（23区）のデータから、猪高緑地に於ける存否に関連する種を取り上げてみると、記録のある種はオナガアゲハ、ジャコウアゲハ、スジグロシロチョウ、トラフシジミ、アカシジミ、ミドリシジミ、コチャバネセセリ（期間中1件だけ）。

記録されなかった種はウラゴマダラシジミ、ミズイロ



図19. オグマサナエ♂, 市絶滅危惧 I B類, 塚ノ杵池で
1978. 5. 3採集



図20. フタスジサナエ♀, 市絶滅危惧 I B類, 塚ノ杵池で
1988. 6. 5撮影



図21. ハッチョウトンボ♂, 市準絶滅危惧, 塚ノ杵池堰堤下で
1987. 6. 13撮影



図22. ベッコウトンボ♂, 市絶滅, 塚ノ杵池で
1987. 5. 10撮影

オナガシジミ, ウラナミアカシジミ, コツバメ, アサマイチモンジ, ジャノメチョウ, ミヤマセセリ, ホソバセセリ, オオチャバネセセリ, ミヤマチャバネセセリとなり猪高緑地の場合と似た傾向が窺われる。

園内に於ける二次林の放置による高層木の益々の高木化による鬱閉で, 中・低木層や幼木の生育阻害や, 樹木・灌木の進出による道端や草地の食草の圧迫, 食樹の高木化による産卵対象としての不適化など諸々の植生環境の変遷がチョウの減少に影響しているのではなかろうか。

園内の植物相を見るに, 樹林は広大, 草地はもともと多くはないが従来と大差ない様に見受けられる。若干の畠作地は引き続き存在する。

水田は一部復活された。湿生草原と呼べる程のもので

はないが, 塚ノ杵池堰堤下など谷筋に極く僅かなそれらしい所が見られる。要するにチョウの棲息環境の多様性は或る程度残っていると見られる。遊歩道の拡幅, ギャップの生成など適度の公園整備は二次林林床に日照をもたらす効果がある。

トンボの場合も, チョウの場合も, そして他の昆虫でも同様であるが, 現在に至る衰亡の要因を総論的に考察すると次の様である。

まず, 猪高緑地東側稜線の東一帯に所在した猪高緑地と同大の長久手市長湊南部の緑地の2003年頃迄に完了した宅地造成である。2市に跨る一塊の大緑地帯の面積が半分になってしまったことは, 種維持には大きな棲息地面積の方が望ましいと言う原則に逆行することとなった。



図23. ミヤマチャバネセセリ，市絶滅危惧ⅠA類，1986. 4. 29採集



図24. ミヤマセセリ，市絶滅危惧Ⅱ類，1986. 4. 29採集



図25. 極稀なクロアゲハ無尾型 1986. 5. 5採集



図26. 同裏面

又、従来から続いて来た造成都市化の進行は、現在もそれなりの好環境を保っている猿投山山麓に続く東部丘陵地帯の長久手市、日進市の丘陵との間に点在する小林地、耕地やため池、小河川と草地の堤等水系を次々と失わせて来た。即ち、長久手市、日進市の丘陵地帯との間に存在した緑や水系の棲息ポイントの繋がり（コリドー・緑の回廊）がなくなり、生物多様性に富む地帯と猪高緑地の間は殆ど市街地で遮断され、中継場所の衰失により移動分散距離も長くなり、良好環境からの昆虫の供給が困難になった。

さらに、瀬戸市南西部、長久手市東部、日進市北部、その東の豊田市西部の東部丘陵地帯と雖も、平地に接する所では二次林地帯、水系が昔のまま保たれている訳ではなく、経済優先の開発が進行し、緑の拠点となるべき

場所、即ち、昆虫の供給源であるはずの場所自体の自然度の低下が著しい。

昆虫は思っているよりも移動分散能力を有しトンボやチョウはその典型の一つである。

それぞれの棲息地域間を我々が気付かないうちに頭上を通過し行き来交流をしており、それが種存続に重要な役割を果たしている。

植物や動物に富んだ自然環境の良好な緑地拠点とそれを繋ぐコリドーの存在が、生物多様性維持に重要であり、孤立化は生物個体群の絶滅に繋がって行く。県はこのシステムを生態系ネットワークと称し、県下全市町村にその構築推進に努める様呼びかけているが、現実にはその実効の程は如何なものか？

ひるがえって、猪高緑地の特にトンボに顕著な絶滅、

減少の状況を見ると、上掲の一塊であった緑地面積の減少、都市化の進行に伴う孤立化（移動分散距離の増大）、供給源の緑被率の低下等自然度の劣化等が相まって、その要因となっていると考えられる。個々の絶滅、減少の説明がつかない多くの種の衰亡要因はこれによると推定される。

一過性の観察会や調査会では、猪高緑地の真の姿は仲々把握できない。見かけの景観は余り変わった様に見えるなくても、ここではトンボとチョウの例であるが昆虫類の衰退は著しい。当地では生物多様性がずっと保たれているとは言い難い現実を知るべきである。

V. 目録

1 トンボ目 Odonata

アオイトトンボ科 Lestidae

オツネトンボ *Sympecma paedisca* (Brauer) 3-V-1978, 1ex. 目撃

ホソミオツネトンボ *Indolestes peregrinus* (Ris) 10-V-1986, 1♂

アオイトトンボ *Lestes sponsa* (Hansemann) 2-X-2016, 11♂

オオアオイトトンボ *L. temporalis* Selys 25-IX-2016, 3♂2♀

モノサシトンボ科 Platycnemididae

モノサシトンボ *Copera annulata* (Selys) 27-VIII-2013, 1ex. 目撃

イトトンボ科 Coenagrionidae

キイトトンボ *Ceragrion melanurum* (Selys) 1-VII-2016, 1♂

ベニイトトンボ *C. nipponicum* (Asahina) 18-VII-2007, 1♂

クロイトトンボ *Paracercion calamorum* (Ris) 29-VIII-2016, 1♂

セスジイトトンボ *P. hieroglyphicum* (Brauer) 29-V-1988, 1♂

モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris) 7-VII-1980, 1♂

アオモンイトトンボ *Ischnura senegalensis* (Rambur) 25-VIII-2016, 1♂1♀

アジアイトトンボ *I. asiatica* Brauer 14-VII-2016, 1

♂1♀

ヤンマ科 Aeshnidae

サラサヤンマ *Sarasaeschna pryori* (Martin) 24-V-2013, 1♂

アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* Selys 18-V-1991, 5exs. 目撃 (吉田雅澄)

ネアカヨシヤンマ *A. anisoptera* Selys 30-VII-2004, 1♂

マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* (Selys) 24-VIII-2016, 1♀目撃

ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (Selys) 27-VII-2004, 1♂

ギンヤンマ *Anax parthenope* (Selys) 19-VII-2016, 2♂目撃

オオギンヤンマ *A. guttatus* (Burmeister) 6-X-1998, 1♂

サナエトンボ科 Gomphidae

ウチワヤンマ *Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius) 22-VIII-2016, 1♂目撃

コオニヤンマ *Sieboldius albardae* Selys 14-VI-1987, 1♂目撃

オグマサナエ *Trigomphus ogumai* Asahina 5-V-1986, 1♂

フタスジサナエ *T. interruptus* (Selys) 14-V-1978, 1♂

オニヤンマ科 Cordulegastridae

オニヤンマ *Anotogaster sieboldii* (Selys) 26-VI-2016, 1♀; 27-VIII-2016, 3幼虫

エゾトンボ科 Corduliidae

トラフトンボ *Epithea marginata* (Selys) 5-V-2016, 1♂目撃

タカネトンボ *Somatochlora uchidai* Förster 23-IX-1986, 1♂

ヤマトンボ科 Macromiidae

オオヤマトンボ *Epophthalmia elegans* (Brauer) 23-V-2016, 1♂目撃

コヤマトンボ *Macromia amphigena* Selys 18-V-1991, 1♂ (吉田雅澄)

トンボ科 Libellulidae

チョウトンボ *Rhyothemis fuliginosa* Selys 1-VII

-2016, 1 ♂
 ナツアカネ *Sympetrum darwinianum* (Selys) 7-X-2016, 3 ♂ 1 ♀
 リスアカネ *S. risi* Bartenev 26-VIII-2016, 6 ♂
 ノシメトンボ *S. infuscatum* (Selys) 1-X-2016, 2 ♂
 アキアカネ *S. frequens* (Selys) 6-X-2016, 6 ♂ 4 ♀
 コノシメトンボ *S. baccha* Selys 2-X-2016, 1 ♂
 ヒメアカネ *S. parvulum* (Bartenev) 29-VII-2016, 1 ♀
 マユタテアカネ *S. eroticum* (Selys) 1-X-2016, 5 ♂
 マイコアカネ *S. kunckeli* (Selys) 6-VII-1986, 1 ♀
 ネキトンボ *S. speciosum* Oguma 7-X-2016, 1 ♀
 キトンボ *S. croceolum* (Selys) 30-IX-1986, 1 ♂
 ハネビロトンボ *Tramea virginia* (Rambur) 16-VIII-1987, 1 ♂
 コシアキトンボ *Pseudothemis zonata* (Burmeister) 12-VII-2016, 1 ♂
 コフキトンボ *Deielia phaon* (Selys) 19-VII-2013, 1 ♀
 ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* Rambur 31-V-1986, 1 ♂ 1 ♀ ; 29-V-1988, 2 ♂ 1 ♀ 目撃
 ショウジョウトンボ *Crocothemis servilia* (Drury) 24-V-2016, 1 ♂
 ウスバキトンボ *Pantala flavescens* (Fabricius) 25-VIII-2016, 1 ♀
 ハラビロトンボ *Lyriothemis pachygastra* (Selys) 12-V-2016, 1 ♂
 シオカラトンボ *Orthetrum albistylum* (Selys) 12-V-2016, 1 ♂
 シオヤトンボ *O. japonicum* (Uhler) 12-V-2016, 1 ♂
 オオシオカラトンボ *O. melania* (Selys) 15-VI-2016, 1 ♂
 ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata* Linnaeus 24-V-2013, 1 ♂
 ベッコウトンボ *L. angelina* Selys 5-V-1987, 1 ♂

2 チョウ目 LEPIDOPTERA

セセリチョウ科 Hesperidae

ミヤマセセリ *Erynnis montanus* (Bremer) 29-VI-1986, 1 ♀
 ホソバセセリ *Isoetes lampropilus* (C. & R. Felder) 6-VII-1986, 1 ex.

コチャバネセセリ *Thoressa varia* (Murray) 18-V-1986, 1 ex
 キマダラセセリ *Potanthus flavus* (Murray) 7-IX-2016, 1 ex.
 ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler) 29-IX-1986, 1 ♂
 チャバネセセリ *P. mathias* (Fabricius) 1-IX-2016, 1 ex
 イチモンジセセリ *Parnara guttata* (Bremer et Grey) 14-V-2016, 1 ex.

アゲハチョウ科 Papilionidae

ジャコウアゲハ *Atrophaneura alcinous* (Klug) 12-V-2016, 1 ♀ 目撃
 キアゲハ *Papilio machaon* Linnaeus 4-VII-2003, 1 ♂ (原弘真)
 アゲハ *P. xuthus* Linnaeus 29-VII-2016, 1 ex.
 クロアゲハ *P. protenor* Cramer 5-V-1986, 無尾型 1 ♀ ; 22-VIII-2016, 1 ♂
 オナガアゲハ *P. macilentus* Janson 30-IV-2005, 1 ♂ (川崎洋揮)
 ナガサキアゲハ *P. memnon* Linnaeus 22-VIII-2016, 3 ♂
 モンキアゲハ *P. helenus* Linnaeus 24-V-2016, 2 exs.
 カラスアゲハ *P. dehaanii* C. Felder et R. Felder 5-VIII-2016, 1 ♀
 アオスジアゲハ *Graphium sarpedon* (Linnaeus) 22-VIII-2016, 1 ex.

シロチョウ科 Pieridae

キタキチョウ *Eurema mandarina* (de l'Orza) 30-III-2016, 1 ex.
 ツマグロキチョウ *E. laeta* (Boisduval) 4-X-2016, 2 exs.
 モンキチョウ *Colias erate* (Esper) 26-V-2016, 1 ♀
 ツマキチョウ *Anthocharis scolymus* Butler 6-V-2016, 1 ♂
 モンシロチョウ *Pieris rapae* (Linnaeus) 12-IV-2016, 1 ♂ 1 ♀
 スジグロシロチョウ *P. melete* Ménétrières 9-VI-2004, 1 ♂ (原弘真)

シジミチョウ科 Lycaenidae

ウラギンシジミ *Curetis acuta* Moore 12-VII-2016, 1♂
 ムラサキシジミ *Arhopala japonica* (Murray) 30-III-2016, 2exs.
 ウラゴマダラシジミ *Artopoetes pryeri* (Murray) 7-VI-1986, 2exs. 目撃
 アカシジミ *Japonica lutea* (Hewitson) 24-V-2016, 1ex. 目撃
 ウラナミアカシジミ *J. saepestriata* (Hewitson) 6-VI-2004, 1♂ (原弘真)
 ミズイロオナガシジミ *Antigius attilia* (Bremer) 6-VI-1987, 2exs.
 ミドリシジミ *Neozephyrus japonicas* (Murray) 1-VII-2004, 1♀
 コツバメ *Callophrys ferrea* (Butler) 24-IV-1986, 2exs.
 トラフシジミ *Rapala arata* (Bremer) 24-IV-1986, 1ex.
 ベニシジミ *Lycaena phlaeas* (Linnaeus) 30-IX-2016, 1ex.
 ウラナミシジミ *Lampides boeticus* (Linnaeus) 25-VIII-2016, 3♀
 ヤマトシジミ *Zizeeria maha* (Kollar) 31-V-2016, 1♀
 ツバメシジミ *Everes argiades* (Pallas) 30-III-2016, 1♂
 ルリシジミ *Celastrina argiolus* (Linnaeus) 26-V-2016, 4exs. 目撃

タテハチョウ科 Nymphalidae

テングチョウ *Libythea lepita* Moore 30-III-2016, 2exs.
 アサギマダラ *Parantica sita* (Kollar) 6-X-2016, 1♀
 ミドリヒョウモン *Argynnis paphia* (Linnaeus) 6-X-2016, 1♂
 ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* (Linnaeus) 13-V-2016, 1♂
 アサマイチモンジ *Limenitis glorifica* Fruhstorfer 1-VII-2016, 1ex.
 コミスジ *Neptis sappho* (Pallas) 23-V-2016, 1ex.
 ホシミスジ *N. pryeri* Butler 26-V-2016, 4exs.
 キタテハ *Polygonia c-aureum* (Linnaeus) 13-III-2004, 1ex. (原弘真)
 ヒオドシチョウ *Nymphalis xanthomelas* (Esper)

30-III-2016, 2exs.
 ルリタテハ *Kaniska canace* (Linnaeus) 30-III-2016, 1ex.
 ヒメアカタテハ *Vanessa cardui* (Linnaeus) 9-IX-2016, 1ex.
 アカタテハ *V. indica* (Herbst) 12-IV-2016, 1ex.
 ゴマダラチョウ *Hestina japonica* (C. & R. Felder) 9-VIII-2016, 1ex.
 アカボシゴマダラ *H. assimilis* (Linnaeus) 7-VIII-2010, 1ex. 撮影 (岩元やよい); 26-XII-2010, 幼虫 2exs. (中橋徹)
 コムラサキ *Apatura metis* Freyer 26-V-2016, 1♀
 ヒメウラナミジャノメ *Ypthima argus* Butler 12-IV-2016, 1ex.
 サトキマダラヒカゲ *Neope goshkevitschii* (Ménétrières) 13-V-2016, 1ex.
 ヒメジャノメ *Mycalesis gotama* Moore 14-VI-2016, 1ex.
 ジャノメチョウ *Minois dryas* (Scopoli) 6-VII-1986, 1♂
 クロコノマチョウ *Melanitis phedima* (Cramer) 24-VIII-2016, 1ex.
 ヒカゲチョウ *Lethe sicelis* (Hewitson) 19-V-2016, 1♂

採集または目撃者名の記載がある種以外は、全て高崎の採集又は目撃である。目撃の精度は採集と同一であることを付記する。

謝辞

アオヤンマ等の記録を御教示下さった吉田雅澄氏に深謝する。

引用及び参考文献

荒尾一樹. 2010. 塚ノ杵池の魚類. ため池の自然, (49): 28-30
 アートデザイン・須田真一編. 2016. ネイチャーガイド東京のチョウ. 生活協同組合パルシステム東京・中央大学理工学部人間総合理工学科保全生態学研究室・東京大学生産技術研究所喜連川研究室, 東京. 105pp.

- 浜島繁隆・須賀瑛文. 1986. 塚ノ杵池と周辺の植物. ため池の自然, (4): 3-5.
- 浜島繁隆. 2004. 塚ノ杵池（名古屋市名東区）の水草でみられた22年間の優占種の変化. ため池の自然, (39): 14.
- 浜島繁隆. 2010. 塚ノ杵池（名古屋市）の水草, 28年間の動態. ため池の自然, (49): 2-3.
- 浜島繁隆・飯尾俊介. 2012. 塚ノ杵池（名古屋市名東区）堤改修後の植物相の変化（短報）. ため池の自然, (53): 10.
- 原 弘真. 2004. 名古屋市内でナガサキアゲハとオナガアゲハを採集. 佳香蝶, 56(219): 58.
- 飯尾俊介・富田啓介・中村肇. 2010. 名古屋市名東区塚ノ杵池の植生及び植物相. ため池の自然, (49): 8-11.
- 鎌田敏幸. 2003. 溜池（名古屋市）に生息するオオクチバス, ブルーギルの食性. ため池の自然, (37): 12-13.
- 川崎洋揮. 2007. 名古屋市猪高緑地のオナガアゲハについて. 佳香蝶, 59(229): 16.
- 木村喜七. 1955. 知多半島の蝶類. 佳香蝶, 7(25): 1-8.
- 間野隆裕・岩元やよい. 2011. 遂に名古屋市で確認されたアカボシゴマダラ. 佳香蝶, 63(248): 89.
- 名東区開設10周年記念誌編集委員会. 1985. ふれあいと緑の名東区. 名東区開設10周年記念事業実行委員会, 132pp.
- 守山 弘. 1996. 雑木林の歴史性と蝶類. 田中蕃・有田豊（編）. 日本産蝶類の衰亡と保護第4集, 77-89. 日本鱗翅学会. 大阪.
- 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課. 2015. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック なごや2015-動物編-. 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課, 名古屋. 504pp.
- 中橋 徹. 2011. 名古屋市内でアカボシゴマダラ越冬幼虫発見. 佳香蝶, 63(248): 90-92.
- 中橋 徹・田澤昂之. 2014. 名古屋市名東区でホシミスジ再度確認される. 佳香蝶, 66(250): 24.
- 中野善敏. 1978. 名古屋市の蝶（第3報）- 1977年の記録 -. 佳香蝶, 30(115): 39-42.
- 大塚 篤. 2005. 名古屋市名東区猪高緑地の蝶. 佳香蝶, 57(223): 51-54.
- 榊原靖・富田啓介・長谷川絵里・西史江・土山ふみ. 2010. 塚ノ杵池の水質に及ぼす植生（水草）の影響. ため池の自然, (49): 4-7.
- 高崎保郎. 1986. 名古屋市でクロアゲハ無尾型を採集. 蝶研フィールド, 1(7): 34.
- 高崎保郎. 1986. 塚ノ杵池とその周辺（名古屋市名東区）のトンボ. ため池の自然, (4): 9-10.
- 高崎保郎. 1987. 名古屋市名東区及び日進市の溜池の注目すべきトンボ2種. ため池の自然, (5): 3.
- 高崎保郎. 1987. 塚ノ杵池とその周辺（名古屋市名東区）のトンボ（第2報）. ため池の自然, (6): 13.
- 高崎保郎. 2004. 名古屋市におけるネアカヨシヤンマの2003年の記録. 佳香蝶, 56(218): 31.
- 高崎保郎. 2010. 名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然, (49): 12-18.
- 高崎保郎. 2010. 池干しとそのトンボに与える影響. ため池の自然, (48): 11-18.
- 高崎保郎. 2012. 愛知県のベニイトトンボ（第3報）. ため池の自然, (52): 13-17.
- 高崎保郎. 2013. 愛知県長久手市の蜻蛉・蝶・自然. 自刊, 名古屋. 188pp.
- 高崎保郎. 2013. 塚ノ杵池の水抜き後のトンボ. ため池の自然 (54): 19-20.
- 高崎保郎・山田直樹. 2013. アカボシゴマダラを名古屋市鶴舞公園で目撃. 佳香蝶, 65(254): 31.
- 高崎保郎. 2014. レッドリスト種調査（2014）に伴う名古屋市の蜻蛉分布知見若干. ため池の自然, (55): 7-13.
- 高崎保郎. 2015. 名古屋市名東区明德公園の蜻蛉と蝶. なごやの生物多様性, 3: 43-53.
- 高崎保郎. 2016. トンボ成虫の近距離移動分散雑録. Pterobosca, (22A): 14-15.
- (財)日本生態系協会. 2010. あいちの生物多様性ポテンシャル気づく・まもる・つなげるマップ. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋. 114pp.